

上代中古における「見る」

百留康晴

はじめに

現代語において「見る」を後項とする複合動詞は「仰ぎ見る」「返り見る」「覗き見る」「盗み見る」など、わずかである。しかし、古語では多くの表現が形成され、現在よりも生産性が高い。また、古語の「動詞＋見る」には現代語の「動詞＋てみる」に見られるような「見る」における意味の抽象化が指摘されており、語構成の観点からのみならず、文法化の観点からも興味深い問題を孕んでいる。

そこで本論では上代中古における「動詞＋見る」（以下「見る」と表記する）を分析し、その意味構造を明らかにすることを目的とする。

一 先行研究

古語における「見る」全体の語構成や意味構造に関する先行論文は管見の限りない。しかし、「見る」の文

法化との関わりから嶋田紀之（二〇〇九）、菊田千春（二〇一一）では古語の「見る」の一部が取り上げられている。また、日本語に見られる「て形」の意味用法を詳述した梶井恵子（一九九七）においても古語の「見る」における抽象化した意味用法が記述されている。

嶋田（二〇〇九）では以下の万葉集、古今集の例を挙げ、これらの「みる」が文法化によって現代日本語における「てみる」のように「試す」の意味に変化している可能性を指摘している。しかし、同時に文法化前の読みつまり「見る」の意味での読み、も絶対に不可能ではなく判然としないと述べている。

1 梓弓 引見 緩見 思見 而 既心齒 因余思物平

（万葉集 一九八六）

梓弓引きみ 緩へみ 思ひ見てすでに心は 寄り
にしものを（梓弓を引いてみたり 緩くしてみた

りするよう^にいろいろと考^えてみて、もはや心
はあなたに寄^つてしま^つたもの^を」

2 時守之 打鳴鼓 数見者 辰余波成 不相毛怪
(万葉集 二六四一)

時守の打ち鳴らす鼓数(よ) み見れば 時にはな
りぬ逢はなくも怪し(時守の打ち鳴らす鼓を数
えてみれば、逢うべき時になつたなあ)

3 折りてみば落ちぞしぬべき秋はぎの枝もたわわに
おける白雪(詠み人しらず：古今和歌集)

菊田(二〇一一)も1・2の例を挙げ、試行のテミルの出現は非常に早く、上代にすでにそうと解釈できる例が見られるとする。しかし、これらを現代のテミルの直接の元と考^えてよいかには疑問の余地があるかもしれないともしている。

これらの先行研究では古語における「^く見る」と「^てみる」とを等し並みに取り扱っている。しかし、動詞連用形に直接接続するものと接続助詞「^て」を介するものとは文法的な成り立ちが異なっているため、本来区別して扱うべきである。その点、菊田が「これらを現代のテミルの直接の元と考^えてよいかには疑問の余地があるかもしれない」と述べていることは穩当である。間接的に「^く見る」が「^てみる」の成立に影響を与えている可能性はあるものの、なぜ「^く見る」ではなく、「^て」を介する「^てみる」が文法化形式として発達したかというこ

とについては別の問題としてさらに検討する必要がある。

そもそも動詞「見る」自体、様々な文脈により意味が拡張している。なおかつ動詞連用形に後接する場合、前接する動詞によって作られる文脈が意味の変容に大きく影響することが考えられる。しかし、現段階ではその記述すら行われていない。まず古語における「^く見る」の意味構造全体を明らかにし、後接する「見る」における意味の変容を実証的に説明する必要がある。

ほかに金水敏(二〇〇五)では日本語の「^てみる」について「語源的には「^p、(そして)見る」と考えられる。「見る」とは何を見るのか。それは^{S_p}に他ならぬ。そして「見る」とは、^{S_p}を評価するということである」という説明がなされている。^{S_p}とは「初期状態^{S₀}において、出来事^pが完成した時の結果の状態」とされ、「^pの完成が語彙的意味として必然的に含意する結果(例えば「AがBを殺す」における「Bの死亡状態」)ではない。後者を語彙的結果状態と呼ぶことにし、これとは区別して、^{S_p}を文脈的結果と呼ぶことにする」としている。この「^てみる」に関する金水の分析は古語の「^く見る」における意味構造の根幹にも合致すると考^ええる。

二 古語における「見る」の意味

考^察するに当たり、「^く見る」を形成する古語の動詞

「見る」の意味を辞書の記述によって確認する。『岩波古語辞典 補訂版』では以下の意味が立項されている。《知覚》の意味から《理解・判断する》《経験する》の意味や《逢う》《面倒を見る》の意味に拡張していることが分る。現代日本語における「見る」の多義構造を分析した田中聡子（一九九六）の分類と比較対照すると表一のようなになる。

- ① 目をとめる。② 眺める。望む。③ 見物する。
- ② ① 見て思う。判断する。② 知る。分る。③ 診断する。
- ④ 試みる。ためす。⑤ 占う。⑥ 読む
- ③ 自分の置かれた状況を目にする。経験する。際会する。

④ 互いに見る。① 逢う。② 男女の契りをする。③ 夫婦となつて暮す。

⑤ ① 面倒を見る。世話をする。② 観察する。調べる。吟味する。

田中聡子（一九九六）

- ① 《視覚》によつて対象を《認知》する
- ② 《視覚》による《認知》に基づき対象を《理解・判断》する
- ③ 対象を《理解・判断》する
- ④ 《視覚》に基づき対象を《理解・判断》して適切な《処置》を取る

⑤ 《視覚以外の知覚》による《認知》に基づき対象を《理解・判断》する

⑥ ある《状況を経験》する／ある《状況が出現》する

表一 現代日本語と古語の「見る」の語義の対照

田中	岩波古語
①	①
②③	②
⑥	③
⑥	④
④	⑤

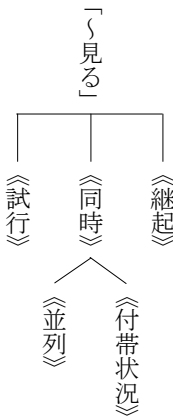
古語の「見る」の意味はほぼ現代日本語における「見る」の意味と一致する。ただし古語の④の意味は現代日本語の「見る」には存在しない。

三 上代における「見る」

上代では万葉集において異なり数二六、延べ数一五五の「見る」の使用が確認できた。その全例を表二に示す。表二からは「逢ひ見る」「出で見る」「返り見る」「振り放け見る」という特定の表現の使用頻度が高いことが分る。「見る」には三語以上の動詞から成るものもあり、それらも用例に加え、表二の下の方にまとめて載せた。これらは「有り通ひ見る」が「有り通う十見

る」のように全体を二語十一語ないし一語十二語のまとまりに分解できるという違いはあるものの、形成する意味構造自体は二語から成る「見る」と同様に捉えることができる。

「見る」がその本来の意味を保っているものについては、前接する動作と継起的に「見る」ことが行われている《継起》と、前接する動作と同時に「見る」ことが行われている《同時》に分けることができ、後者には前接する動作が「見る」際の付帯状況を表す《付帯状況》と前接する動作が「見る」と並列的に表現される《並列》とがある。また、後接する「見る」の意味が希薄化し、現代日本語における「てみる」のような《試行》の意味に取れるものがある。これらの用法に応じて「見る」を分類し、表二の左に《継》《付》《並》《試》として示した。なお「うち見る」「取り見る」については接頭辞化しているため、これらのラベルは貼らない。



表二 万葉集における「見る」

並	逢ひ見る	71
継	仰ぎ見る	1
付	怒り見る	1
継	出で見る	11
	打ち見る	1
継	負ひ見る	1
並	思ひ見る	1
継	返らひ見る	1
継	返り見る	17
継	立ち見る	3
継	解き見る	1
	取り見る	5
継	為し見る	1
継	引き見る	2
継	巻き見る	1
継	抱き見る	1
継	ゆるへ見る	2
継	数み見る	1
付	笑み見る	2
継	有り通ひ見る	1
継	打ち越え見る	1
継	掻き撫で見る	1
継	偲ぶらひ返らひ見る	1
継	携はり出で立ち見る	1
継	解き開け見る	1
継	振り放け見る	22

次に意味構造の記述を行う。1、2の例は《継起》と捉えられるものである。これらは「ある行為を行った後、眼前の光景を視覚によつて捉える」という意味構造を形成している。このような意味構造を形成する「見る」は非常に多い。他に、3の「数み見る」ように捉える刺激を知覚する用法に拡張している例も見られた。3の例は「時守が打ち鳴らす鼓の音を声に出して数えてみると約束の時刻になったのに会いに来ないのはおかしい」という意味の歌で、「見る」が捉えるものは「鼓の音」である。視覚は他の感覚に比して優位性があり、「味を見る」「手触りを見る」「音色を見る」のように他の五感で捉える刺激に対しても使用される。

1 ひさかたの 天見るごとく 仰ぎ見し(仰見之)

皇子の御門の 荒れまく惜しも(万葉集 二 一六

八)

2わが背子を 今か今かと 出で見れば(出見者)

沫雪降り 庭もほどろに(万葉集 十 二二二)

(三)

3時守が 打ち鳴す鼓 数みみれば(数見者) 時に

はなりぬ 逢はなくも怪し(万葉集 十一 二六四)

(一)

4、5の例では「見る」が眼前の光景を視覚によって捉える意にとどまらず、その後の展開にも視野を広げる用法にまで拡張している。

4の例は《継起》の例であるが、「二人で結んだ紐を一人では解かない」と歌ったものである。当時男女が別れる際に互いの衣の紐を結び、再び逢うまで解かないと誓うという習俗があり、それを踏まえて詠まれたものであるが、この「見る」は「紐を解いて生じる眼前の光景」だけでなく、「その後の二人にどのようなことが起るか」までも把握する、体験することによって表現内容が及んでいるように感じられる。「解かじ」でも意味は伝わるものの「見る」を加えたというところに、将来への眼差しがあると考える。

《並列》と捉えられる5の例の「思ひ見て」も「二人の間の関係をいろいろ考える」のであるが、その現状を捉えるだけでなく、時間の推移によって生じるであろう出来事にも知覚対象が移っていると見られる。そこで、これら「解き見る」「思ひ見る」の「見る」では空間か

ら時間へという視野の広がりを感じられる。

4二人して 結びし紐を ひとりして 我れは解き見

じ(吾者解不見) 直に逢ふまでは(万葉集 十二

二九一九)

5梓弓 引きみ緩へみ(引見弛見) 思ひ見て(思見

而)すでに心は 寄りにしものを(万葉集 十二

二九八六)

他に5の「引きみ緩へみ」、6の「負ひみ抱きみ」、7の「笑みみ怒りみ」のように二つの「見る」が対句的に並べられる例がある。これらの「見る」は「…したり…したり」の意を表すとされ、現代日本語の「てみる」同様「試しに…する」の意に転じているという見方もある。しかし、歌の内容からこれらの表現が眼前の光景を視覚によって捉えているところから生まれているであろうことは事実で、「見る」本来の意味を完全に失っているとは言えない。そのことは漢字表記に「見」という字を使用していることから窺えるように思える。

そこで、これらは完全に「見る」本来の意味を失っているわけではなく、「視覚によって現状を把握する」という意味を中核としつつ、知覚対象が「行為を行った後の結果」に移り、かつ、形式化し、修辭的に用いられたものであると考える。なおこのような用法には8の例のように二つの「見る」の間に他の語句が入ることも

ある。

6男じもの 負ひみ抱きみ (負見抱見) 朝鳥の 音
のみ鳴きつつ (万葉集 三・四八二)

7はね縷 今する妹が うら若み 笑みみ怒りみ (咲見愠見) 付けし紐解く (万葉集 十一 二六二七)

8にほひよる 児らがよちには 螻の腸 か黒し髪を
ま櫛もち ここにかき垂れ 取り束ね 上げても巻
きみ (拳而裳纏見) 解き乱り 童になしみ (童児
丹成見) (万葉集 十六 三七九二)

四 中古における「〜見る」

中古では和文資料において異なり数五〇、延べ数三四一の「〜見る」の使用が確認できた。その用例および延べ数を表三に示す。

上代同様「逢ひ見る」「うち見る」「思し見る」「返り見る」「聞き見る」「踏み見る」「待ち見る」など特定の表現の使用頻度が高い事傾向が明らかになった。このうち「うち見る」は接頭辞化、「思し見る」は敬語化、「踏み見る」は「文見る」との掛詞、という点からその使用頻度の高さの背景が推測できる。その他はこの時代に比較的慣用化されていた表現であったと見られる。特に「返り見る」は上代でも中世でも根強く使用され続け、現在では「顧みる」「省みる」などと表記の面でもその

語源意識が薄れるほど定着している。

表三 中古和文における「〜見る」

並	眺め見る	2	試	遊ばし見る	1
試	濡れ見る	1	並	逢ひ見る	89
繼	覗き見る	1	付	急ぎ見る	2
試	弾き見る	1	並	うけたまはり見る	1
繼	伏し見る	2		うち見る	61
繼	踏み見る	16	付	驚き見る	1
繼	まかり見る	1	繼	おほしまし見る	1
繼	待ち見る	19	並	思し見る	15
繼	参り見る	6	試	おほせ見る	1
並	睦び見る	1	並	思ひ見る	1
繼	漏り見る	1	並	思ほし見る	2
繼	分け見る	1	繼	帰り見る	1
繼	渡り見る	1	繼	返り見る	65
繼	折り見る	1	繼	構へ見る	1
繼	うち返り見る	2	繼	通はし見る	1
繼	うちとけ見る	1	並	聞き見る	15
繼	思し返り見る	2	並	比べ見る	1
繼	思し召し返り見る	1	試	誘ひ見る	2
繼	さし覗き見る	2	繼	たづね見る	4
繼	立ち寄り見る	1	試	たばかり見る	1
繼	たづね返り見る	1	繼	伝へ見る	1
繼	育み返り見る	1	繼	ととのへ見る	1
繼	振り放け見る	1	繼	とどめ見る	1
繼	待ち迎へ見る	2	試	問ひ見る	1
繼	見返り見る	1	繼	とぶらひ見る	2

次に「〜見る」を《継起》《付帯状況》《並列》《試行》に分類し、その意味構造を記述していく。「うち見る」については接頭辞化しているため、これらのラベルは貼らない。

まず「見る」がその本来の意味を保っており、前接する動作と継起的に行われているものは以下のようなものである。9は藤原道長が高野山に詣で、弘法大師の入滅

された様子を見るという例である。前接する「覗く」は「見る」という動作の実現を可能にするための動作となっている。

10 は狭衣が伊勢物語を読んでいるうちに自分が恋する源氏宮に対する感情がいつそう募り、告げようとしたが言い出せなかった歌の例である。「昔の跡」は「伊勢物語」をさし、その「昔の跡」を目で確認してくださいという意味になっている。10の例でも「見る」はその本来の意味を保っており、前接する動作は「見る」という動作の実現を可能にするための動作となっている。

11 は三条院が亡くなり、その姫宮禎子内親王が書いた書を見て中宮・子（道長の次女）は涙を抑えがたくお思いになり、皇子たちも御無沙汰することなくお越しになって、姫宮にお会いになり、東宮からもちよつとした玩具の様々をお差し上げになるといふ例である。この「渡り見る」では前接する動作が「見る」という動作の実現を可能にするための動作となっていることは同じであるが、「見る」が「視覚によつて対象を捉える」意から「会う」の意味に拡張している。このような「見る」は男女の間という文脈で用いられる場合に「夫婦として暮らす」という意味も含んでいる。

12 は帝になった狭衣を自分の娘のところへ通わせ、世話をする方法はないかと上達部や皇子たちが望んでいたという例である。この例では「見る」は「視覚によつて対象を捉える」意から「世話をする」という意味に拡張

していることが分る。「見る」の意味に様々な広がりがあることに応じて、動詞に後接する「見る」にも意味の広がりが見られる。

9 高野に参らせ給ひては、大師の御入定の様を覗き見奉らせ給へば、御髪青やかにて、奉りたる御衣いささか塵はみ煤けず、鮮やかに見えたり。御色のあはひなどぞ、珍かなるや。ただ眠り給へると見ゆ。
(栄花物語 卷十五)

10 よしさらば昔の跡を尋ね見よ我のみ迷ふ恋の道か
は
(狭衣物語 卷一)

11 (禎子内親王が)「あて(故三条院)は膺をば恋しとは思ひ給はぬか。などいと久しく渡らせ給はぬ」など、書き続けさせ給も、涙止めがたく御前(中宮・子)もおぼしめし、候ふ人くも思へり。宮達なども、おぼつかながらず渡り見奉らせ給ひ、東宮よりもはかなき御遊物ども奉らせ給。
(栄花物語 卷十三)

12 年比、「いかさまにして、(狭衣を)たまさかにも、(我が娘のところに)かよはし見たてまつるわざもがな」と思願ひ給へる上達部・親王たちなど
(狭衣物語 卷四)

前接する動作と同時に「見る」ことが行われているものは以下のようなものである。13 は帝が勅使として蔵

人を左大将のところへ遣わし、同時に左大臣と中納言の二人も遣わしたが、二人が入ってきたことに左大将は気が付かず、松明を灯した兵衛尉が急に入ってきたので驚いてご覧になったという例である。前接する動詞「驚く」は後接する「見る」が表す動作をする際の左大将の心の変化を表している。これは「見る」際の主体の付帯状況と考えることができる。一方14は源氏が女性たちに合奏をさせ、その様子夕霧が御簾の外から聞いたり見たりしているという例である。前接する動詞「聞く」と「見る」とは対等な関係で結び付いており、並列とした

13 蔵人参りて、左のおとど、平中納言連ねて入りたまふを、(左大将は)え知りたまはず、御前の御前松ともしたる兵衛尉ども、にはかに入るにおどろき見たまふ。(うつつ物語 祭の使)

14 これもかれも、うちとけぬ御けはひどもを、聞き見給ふに、大将(夕霧)も、いと内ゆかしくおぼえ給ふ。(源氏物語 若菜下)

また、後接する「見る」の意味が希薄化し、現代日本語における「てみる」のような「試行」の意味に取れるものは以下のようなものである。

15 は仲忠に琴を弾かせたい帝の発語で「涼の朝臣が弾けば、仲忠の朝臣には『そなたの競争者が弾くのだから、それに合奏して弾奏せよ』ということもできよう。

辞退するはずもない涼までが辞退してこんなことをいう。ましてあの意地つばりの仲忠が、素直に承知するだろうか。まあよい、試しに弾くようにいつてみよう」と仰せになっているという例である。この例の「仰せ見る」における「見る」は本来の「対象を視覚によって捉える」という意味が希薄化し、「試しにする」という意味になっているように見える。

また、16は山の中のうつつほで暮らすようになった母が子に「今は暇ができたようなので、私の父上がたいせつなことと思つて教えてくださった琴をあなたに教えてさしあげましょう。弾いてごらんなさい」と言っている例である。この場合の「見る」も「弾くことを試しにする」という意味になっているように見える。

しかし、「見る」は「知る・判断する」という意味にも広がっているため、「仰せ見る」や「弾き見る」などが形成する意味構造を「ある動作を行い、その結果を知る・判断する」といったものと解釈することができる。

結局、先行研究でも述べているようにこの時点で「見る」における「見る」が本来の意味を失い、「試しにする」という《試行》の意味を添える働きをしていると断定することはできない。このような「見る」にも「見る」本来の意味が拡張した形で残っていると見る方が穏当であろう。

現代日本語における「てみる」が持つような「試しにくする」という《試行》の意味は文意全体に付加される

ものである。そこでそれぞれの用例について今後文意全体の意味、前接する動詞に対する制約、といった観点から再検討する必要がある。

15 「涼の朝臣仕うまつらばこそは、仲忠の朝臣は、『きしろひたる人仕うまつるに、これにかき合せて仕うまつれ』とも言わめ。すまふまじき涼だにかくいふ。ましてかのあやにく者は、まさに聞きてむやよし仰せみむかし」とのたまひて

(うつほ物語 内侍のかみ)

16 「今は暇あめるを、おのが親の、かしこきことに思ひて教へたまひし琴、習はしきこえむ。弾きみたまへ」といひて

(うつほ物語 俊蔭)

他に《継起》と分類したものに前接する動詞と「見る」の主体が異なるものがある。17 18 に示した「漏り見る」「伝へ見る」である。17 は藤壺女御の姿が几帳か扇などの隙から漏れて源氏がそれを「見る」という例である。この場合前接する「漏る」は自動詞で藤壺女御の変化を表している。そして「見る」主体は源氏で両者は主体が異なっていると言える。

18 は母の尼君を亡くした姫君が同腹の姉が異国にいることについてどうして同じ国においでにならなかつたのだろう、日本においでならば、一緒に、こうした住まいや境遇も格段に、心を慰めるところもあるであろうの

にと、おのずから思い知ったので悲しく思い、遠くから来たお手紙だけを辛うじて見た時は、ますます、一体どういう世に、夢ではなくて見聞き申し上げることがあるうと、悲しさがつのるのに、という例である。「見る」主体は姫君であるが、文を伝えるのは姫君ではない。

17 (どの女御・更衣達も) とりどりに、いとめでたけれど、うちおとなび給へるに、(藤壺女御は)いとわかう美しげにて、切にかくれ給へど、(源氏は)おのづから漏り見たてまつる。(源氏物語 桐壺)

18 などおなじ世におはせけん、さあらましかば、諸共にかかるすまゐりさま、こよなくなぐさめどころもありなまし物をと、うち思ひ知られしままに悲しかりしを、はるかに御文ばかりを、わづかに伝へ見しは、いとど、いかならん世には夢ならでは見きたてまつらんと悲しさまさるに、

(浜松中納言物語 卷四)

現代日本語の複合動詞には「主語一致の制約」がある²⁾とされ、中古の「漏り見る」「伝へ見る」はこの制約に従わない例と見ることが出来る。しかし、「主語一致の制約」に従わない例は極めて限られているが、現代日本語にも「譲り受ける」「申し受ける」「死に別れる」「伝へ聞く」「漏れ聞く」「泣き濡れる」「寝乱れる」

「寝静まる」などがあり³、「漏り見る」「伝え見る」は「漏れ聞く」「伝え聞く」と意味構造が類似する。これらは主体の異なる動詞間の例外的な結合と言えるかもしれない。

五 まとめと課題

本論では上代中古における「見る」の意味構造を記述した。視覚は人間の五感の中でも優位性を持ち、「見る」という動詞はその行為を表す。また「見る」の意味は人間の知覚や認識を反映して様々に拡張している。それが日本語の歴史の中でどのように変遷しているのか、さらには複合動詞のように他の動詞と結びついて表現を形成する場合にそれがどのように反映されているのかという問題は非常に興味深い問題である。かつこれらの問題は日本語における文法化の問題とも関連している。それらを全て今後の課題としたい。

注

1 野村雅昭・石井正彦・林翠芳（一九八七）によれば、「見る」を後項とする複合動詞は「仰ぎ見る」「窺い見る」「打ち見る」「振り返る」「透かし見る」「睨み見る」「盗み見る」「覗き見る」「望み見る」のみである。

2 松本曜（一九九八）

3 浅尾仁彦（二〇〇七）

付記

足立悦男先生とは三年間と少し、ご一緒させていただきました。とても短い間ではありましたが、留学生に対する心配り、教育実習時の学生に対する指導などのご様子を拝見しながら、専門外の国語教育のことに關しても多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。

本論は平成二三年度科学研究費補助金若手研究（B）二二七二〇一八一の助成を受けてなされた。

参考文献

浅尾仁彦（二〇〇七）「意味の重ね合わせとしての日本語複合動詞」『京都大学言語学研究』二六
梶井恵子（一九九七）『日本語の機能表現形式——「て形」のすべて——文法とコミュニケーションをつなぐもの』凡人社

菊田千春（二〇一一）「複合動詞テミルの非意志的用法の成立——語用論的強化の観点から」『日本語文法』一一一—二

金水敏（二〇〇四）「文脈結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」『日本語の分析と言語類型』柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版

嶋田紀之（二〇〇九）「Vてみる」の多義性と文法

化」『認知言語学会論文集』九

田中聡子（一九九六）「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』一一〇

仁田義雄（一九九五）「シテ形接続をめぐって」『複文の研究 上』くろしお出版

野村雅昭・石井正彦・林翠芳（一九八七）『複合動詞資料集』

松本曜（一九九八）「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』一一四

資料一覧

『万葉集』 『うつほ物語』（新編日本古典文学全集）
『竹取物語』 『伊勢物語』 『平中物語』 『落窪物語』
『大和物語』 『枕草子』 『和泉式部日記』 『源氏物語』 『夜の寝覚』 『浜松中納言物語』 『堤中納言物語』 『狭衣物語』 『栄花物語』（以上日本古典文学大系）
『土佐日記』 『蜻蛉日記』 『紫式部日記』 『更級日記』（以上新日本古典文学大系）